

姉崎の ISNA の歩みとわが国のスヌーズレンの発展(6 訂版)

スヌーズレンを愛する、後進の皆様のために、私の歩んできた ISNA と私が関与してきたわが国のスヌーズレンの発展について少しまとめておくことは大変重要であり、必要であると考え、以下に述べます。私の知り得る部分についてのみ、一部私見が入るかもしれませんのが事実を述べたものです。文章表現の中で私の誤解がありましたらどうかお許し下さい。なお、今回用語の誤りはできるかぎり正しました。

①2002 年の日本の某団体主催のスヌーズレンセミナーでの疑問が姉崎の研究の出発点になっていました。「スヌーズレンは教育ではない」と見なす見解は、本当に正しいのかと素朴な疑問を抱きました。

1994 年に、当時私が勤務していた静岡県の肢体不自由養護学校で、高等部の重度・重複障がいグループの生徒たちを対象に、光と音楽の感覚刺激を活用した教育実践を同僚の教師たちと一緒にすでにやっていて、生徒たちは自発的な発声や目の輝き身体のさまざまな動きを通して、自分たちが置かれた環境の刺激から受ける楽しさや喜びを素直にそれぞれに表現していました。私たち教師は、生徒たちに寄り添いながら、生徒たちの楽しそうな声や動きに共感して、一緒になって「楽しいね、嬉しいね、きれいだね」と言葉に表して生徒たちに伝えました。私たち教師は、これまでの教育経験から、この重度障がいのある生徒でも、教師が子どもたちの興味・関心のある活動(刺激)を用意して、まわりの環境を工夫することで、たとえ反応の乏しい生徒であっても、さまざまな自発的な目や身体の動きを引出せることを、これまで行ってきた数々の授業を通して、すでに学んでいました。このようにこの生徒たちの望ましい反応を少しずつ引出せましたので、スヌーズレンは教育活動であると、私たちは確信しています。私が 2022 年に全国の肢体不自由特別支援学校の教師にアンケートで聞いたところ、「はっきりわかりません」と回答した、スヌーズレン授業をほとんど知らない数名の教師を除いて、実践経験のある全員の教師が「スヌーズレン授業は教育である」と回答していました。このことは事実です。

私は後に、2002 年に日本の某団体主催のセミナーに参加して、これが「スヌーズレン」という取組みであることを初めて知りました。この日本の某団体は、わが国でいち早く団体を組織して、スヌーズレンのセミナーを開始して日本のスヌーズレンの発展に大きく貢献してきた団体で、その点は高く評価しています。この日本の某団体は 1999 年に設立されていて、2002 年設立の世界の ISNA よりも早くから活動を開始しています。しかし、同団体は、セミナーの中でスヌーズレンが教育活動であり、教育に活用できることを否定していました。私は正直、これには大変驚きました。創始者たちは、あくまで「人間にとって心地よい環境空間の設定」や「利用者の好みとペースを大切にすること」、「決して利用者に無理強いしないこと」、さらに「利用者が安心し信頼できる介助者(パートナー)の存在が必要であること」などを重視していました。そしてスヌーズレンは、「教育」のような、発達を主眼(目標)にはしていないこと等を強調していました。それは、教育は目標を設定して、子どもにそれを達成するように仕向ける活動であり、その場合、子どもの好みの活動を子どもに強いる場合があるためである、と考えることができます。このように教育ととらえることはスヌーズレンではない、誤りであるとのことでした。それはオランダで始められたスヌーズレンの創始者たちの理念や考え方とは異なることであったように思われます。このように、スヌーズレンと教育を明確に区別して捉えられていました。しかし、スヌーズレンの授業に参加することによって子どもの発達が促進されるならば、保護者はわが子のその姿を見て何よりも喜ぶのではないかでしょうか。理念を一方的に主張するのではなく、対象者の変容した姿を見て、その理念が正しいのかどうかを判断し、必要があれば、理念の再検討や再修正を行う必要があるのではないかと私は考えます。

しかし私は上記の「発達を主眼(目標)にはしていない」との理念や考え方を強調することに大変大きな疑問を抱きました。この疑問は、決して私だけが抱いたものではないと思います。日本の某団体のこのような考え方には、私たち障がい児教育の現場教師がスヌーズレン授業の実践経験から自分たちが学ん

できた知見や考え方と相容れなかつたからです。学校教育、特に障がいのある子どもの教育では、創始者の言うように、心地よいと感じられる、安心することのできる環境設定を心掛けますし、子どもの興味・関心のあることを教材にして授業内容を設定し指導方法を工夫します、無理強いは教育的に見て逆効果になるため、決してそのようなことはしないで、あくまでも子どもの主体的で自発的な、意欲的な活動を引出し見守り、子どもの取組みや頑張りを認めてできるだけ讃めて自信をつけさせようとします。そして、教師はいつも子どもの側に寄り添って、子ども自身から学びながら、何よりも子どもが安心できる、信頼できる、良き介助者や相談相手になろうと努めます。

創始者たちの著書 “Snoezelen, another world”(1987) 姉崎 弘監訳『スヌーズレン—もう一つの世界』(2015)を熟読すると、創始者たちは、一方では、「発達と治療をスヌーズレンの中心的な機能にしたわけではない」と述べながらも、他方では、「スヌーズレンは彼ら(重度知的障がい者)の発達、感覚の活性化、セラピーにも使用することができる」とも述べています。このことは、一見して矛盾しているようにも考えられますが、創始者たちは、スヌーズレンがリラクゼーション等の活動に利用できる以外にも、いろいろな方面に利用することができることを理解していました。この理解が大切であると考えられます。結論として、今日では、創始者たちの基本理念を十分に尊重しながらも、国際的には、スヌーズレンはレジャー、教育、セラピー等として各方面で積極的に活用されています。

「発達や治療をスヌーズレンの中心的な機能とは考えない」と線引きをしたとしても、スヌーズレンの実践を通じて、学校の教師であれば「発達の支援」を行うために活用することになり、また作業療法士であれば、患者を前にして治療としてのセラピーを行うことになるのは、職業柄、ごく自然のことであり、そのようなことをすること自体が間違っている、とは決して言えないと考えます。スヌーズレン実践において、利用者を目の前にして、それぞれの専門家がその持っている専門性を生かして発達支援やセラピー活動を熱心に行なうことは当然のことであるため、あえて「スヌーズレン」と「発達支援や治療」を線引きして一線を隔すこと自体が、もはやほとんど意味をなさないのではないかと考えられます。従って、スヌーズレンは、それを使用する人の専門性や目的に応じて、レジャーやレクリエーションの他に教育、セラピーなど、多方面に自由に活用してよいと考えられます。この理解は大変重要です。創始者たちも著書の中でその使用は自由であると述べています。

創始者たちがスヌーズレンで大切にしている基本理念は、今日のわが国の特別支援教育の学校現場でも同じように取り組まれているものです。従って、例えば、受験に向けて、子どもを目的校の大学へ合格させることを目標に、それを達成させようとして、親が子どもに努力するよう仕向けて頑張らせようとする取組みは、一見して立派な教育のようにも見えますが、実はここに、子ども本人による自発的で主体的な取組みが見られない場合には、本来の教育とは少し異なる取組みに陥る危険性が潜んでいます。本来の教育とは、元々の意味としては、辞典によると、子ども自身の持っている「さまざまな能力や可能性を引出し、それを育てようとする取組み」のことを指しますので、子どもの主体的な活動を尊重して引出し、それを育てようとするスヌーズレンの取組みは正に「教育」そのものであって、「教育ではない」とは決して言えないことになります。本来の教育について理解のある人であれば、スヌーズレンの実践活動やその考え方は、正に、子どもの持っている可能性を引出し、それを尊重して育てようとする取組みであって、本来の教育活動そのものである、といえると私は考えています。

この私どもの主張を立証するために、私は 2003 年からスヌーズレンの研究を開始しました。真実はどうらなのかを見極めるためです。それまで、わが国にはスヌーズレンを学術的に研究を行う団体が一つもありませんでした。ここに大きな問題がありました。これは言い過ぎかもしれません、これまで創始者たちの著書の内容を十分に吟味・検討しないまま、わが国の人々にスヌーズレンを伝え広めてきた感がしてなりません。日本の某団体では、当初よりなぜか理由は定かではありませんが、「スヌーズレンの研究はしない」というスタンスを取ってきたように思われます。しかし研究をしないままでは、スヌーズレンの真の理解やわが国のスヌーズレンを発展させることは難しいのではないでしょうか。私の知り得る限り、私が参加してきた 2010 年までの海外の国際スヌーズレンシンポジウムにおいても、日本からの研究発表や実践発表が一つもなく、私の研究発表以外には発表する人が誰もいなかったのが事実です。

しかし海外ではスヌーズレンの研究発表や論文が毎年どんどん発表されていました。

②世界のスヌーズレンを牽引してきた創始者たちとマーテンス博士の、スヌーズレンを代表する人々の書籍を日本語に監訳し出版したのは姉崎です。

私はスヌーズレンの研究を開始した 2003 年当時、海外のオランダで始められ、ドイツ等で学術的に検証され研究されたこのスヌーズレンの基本的な書籍が、1 冊も日本語に翻訳されていないことに気がつきました。そこでまず初めに、創始者たちによる取組みや考え方をまとめた書籍を日本に紹介し広める必要を痛感しました。また同時に、世界のスヌーズレン研究の第一人者とされるドイツ・フンボルト大学の研究者の方の書籍を翻訳してわが国に紹介をすることも欠かすことができないと強く感じました。これらの基本的な書籍の翻訳書が、まず始めに日本社会で紹介されなければ、海外のスヌーズレンを正しく理解して日本で広めることはできないと考えました。

2003 年に、ドイツ・フンボルト大学の Prof.Dr.Mertens,K.(以下、マーテンス博士)は、スヌーズレンの最初の書籍 "Snoezelen—Eine Einführung in die Praxis." Verlag modernes lernen Borgmann 『スヌーズレン—実践入門』をドイツ語で出版しました。そこで、私は、2008 年に幸運にも、当時の文部省から国費で、ドイツのフンボルト大学のマーテンス博士の研究室に留学する機会に恵まれ、この留学中、ドイツ語と英語が堪能で、日本語もかなり上手に話せるドイツ人のマティーアスさんと親しくなり、難解なドイツ語版を英語版も参照しながら、マティーアスさんの支援を受けながら日本語に翻訳し、帰国後は当時勤務していた三重大学の学部 3 年生たちに、「実践の単元」についての下訳をお願いし、私は理論編を中心に翻訳を行い、最後に本の全体の文言を私が整理して用語の統一を図り監訳者として責任を持って、この本をなんとか日本語に翻訳して 2009 年に出版しました。私のドイツ留学中は、今後のわが国のスヌーズレンの発展を願って、アパートの部屋に籠ってこの書籍の日本語への翻訳にその大半を費やし、正に悪戦苦闘しながら集中して日本語の訳を進めていったといつても過言ではありません。

そしてこの本の内容を読者にわかりやすくするため、私は、姉崎 弘監訳/マティーアス・アンデルス訳『スヌーズレンの基礎理論と実際—心を癒す多重感覚環境の世界—』と書名を改めて、大学教育出版と、後に学術研究出版/ブックウェイの 2 つの出版社から出版され、後の書籍は改訂第 2 版まで出版されています。この本は、スヌーズレンの基礎理論と実践方法を初学者向けに、理論と共に、具体的な単元の中で実践展開例を示していて、初学者にも大変理解しやすい内容になっています。

次に 2015 年には、スヌーズレンの共同創始者である、Hulsege,J と Verheul,A(以下、フルセッヘ氏とフェアフル氏)が世界で最初に書いたスヌーズレンの書籍である、フルセッヘ氏とフェアフル氏共著 "Snoezelen, another world". ROMPA.(1987 年の英語版)を翻訳し、やはり内容をわかりやすくするため、書名を改めて、姉崎 弘監訳『重度知的障がい者のここちよい時間と空間を創るスヌーズレンの世界』(福村出版)として出版しました。この本は、最初オランダ語版が 1986 年に出版され、翌年の 1987 年に英語版が出版されました。私はこの英語版を翻訳しました。当時勤務していた三重大学の院生の現職教員に翻訳の下訳をしてもらい、私が最後に文言を統一して整理し監訳したものです。この本は、スヌーズレンの基本的な考え方や創始者たちが大事にしてきたスヌーズレンの理念や思想、さらに手作りによるスヌーズレン教具の作り方や実践上の留意点についても述べています。

上記の 2 冊の本が、世界のスヌーズレンを学ぶ上での基本的な出発点になっている原典であるといえます。

③スヌーズレンが「レジャー」の他に「教育」や「セラピー」としての側面を有することをわが国で初めて学術的に提唱したのは姉崎です。

これに先立つ 2007 年に私が発表した論文、姉崎 弘著「英国の Special School における Snoezelen の教育実践に関する調査研究—Snoezelen の概念をめぐって—」(三重大学教育学部研究紀要 58,pp. 99-105)の中で、私は英国の Special School 数校での 2005 年の聞き取り調査とその後の考察を通じて、スヌーズレンがレジャーの他に、セラピーや教育としての側面を有すると考えられることを発表していま

した。この姉崎の見解は、わが国では、これまで誰も提唱していなかったため、始めこの姉崎の説に賛同する人は誰もいなく、逆に「それは違う」と反対され、私は大きなショックを受けて残念ながら孤立無援になりましたが、幸いにも、私の見解は上記のマーテンス博士の見解と同一のものであったことから、私は自分の学説に自信を持つことができました。私はその後も、日本特殊教育学会の大会で、この学説をポスターで研究発表をしたり、スヌーズレンの自主シンポジウムを毎年のように開催したりして、スヌーズレンが正に教育活動であることを、学会に参加した人々や全国に向かって発信しつづけてきました。

私は2009年に、マーテンス博士の書籍の翻訳出版を記念する講演会を三重県総合文化センターの大会議室で開催しました。マーテンス博士は、元々特別支援学校や通常学校で十数年に及ぶ学校現場の教職経験を経てから、大学教員になられた方で、私と同じく学校現場での十分な教育経験を有し、教育活動やさらにセラピーにも精通していました。そして1970年代後半にオランダでスヌーズレンが始まると、マーテンス博士はいち早くオランダに赴いてスヌーズレンの実践について詳細な観察を行い、自らそれを追実践しながら、世界に先駆けて一つ一つの実践を検証しつつ研究を開始し、科学的な根拠に基づいてスヌーズレンの理論を構築していかれた、正に世界におけるスヌーズレンの実践と理論の両面に精通した二刀流のパイオニアであったといえます。従って、このマーテンス博士の実践と研究の成果は、一方では、創始者たちの理念や思想を重視しながらも、他方では、創始者たちとマーテンス博士の両者の説が一部一致しない点が見られたことから、一部博士独自の学説を主張する必要があったのではないか、と考えられます。今日でも、世界でスヌーズレンの実践と理論の両面に精通した専門家は極めて少ないのが現状であると思われます。

2002年にフンボルト大学で、創始者の一人フェアフル氏とマーテンス博士が共同で設立したISNA(International Snoezelen Association: 国際スヌーズレン協会)は、姉崎がマーテンス博士の身近で見たところでは、マーテンス博士の主導のもとに設立され、世界に先駆けた世界初のスヌーズレンの国際的な研究団体として始められました。マーテンス博士は、創始者のフェアフル氏をまず第一に立てられて、あくまでも自身はナンバーツー(No.2)であり続けようとされていたと見受けられます。自分が決して一番になろうとされなかつたところが、人間的に見て博士の大変偉いところであり、必ず公の場では、まず最初に創始者たちを前面に出されてスピーチをお願いし、その次にマーテンス博士がスピーチをしていました。

私は幸いにも、2008年に当時勤務していた国立の三重大学から国費で、数か月間ドイツのベルリン市にあるフンボルト大学のマーテンス博士の勤務するリハビリテーション科学研究所に、スヌーズレンの研究調査のため在外研究員として派遣される機会に恵まれました。私はマーテンス博士の薰陶を受けながら、ドイツ国内はもとよりヨーロッパのさまざまなスヌーズレン施設や学校のスヌーズレンルームの見学をし、デンマークにあるモーリツ氏(マーテンス博士の後任である現ISNA-mse会長)の施設にも宿泊させてもらいながら見学し、友好を深めています。またドイツ留学中に海外のスヌーズレンセミナーにも短期間参加する機会に恵まれたことは大変幸運であったと思っています。マーテンス博士は、スヌーズレンはリラクゼーションやレジャーとして楽しむだけではなく、時には患者を治療するセラピーや、学校では子どもの発達を支援する教育活動としても、利用することができるなどを、英語で自らのスヌーズレン実践による裏付けと深い洞察力をもとに確信をもって、フンボルト大学の博士の研究室で、秋の深まる中、私に熱心に語ってくれたことを昨日のことのように思い出します。

創始者たちは、スヌーズレンは利用者がその場を楽しむこと、リラックスすることに重点を置いていますが、その一方では、創始者たちは、最初の書籍である“*Snoezelen, another world*”『スヌーズレン、もう一つの世界』の中で、「スヌーズレンは、セラピーや教育にも利用することができる、それは自由である」ことについても言及しています。このことは大変重要な点ですが、私の知り得る限りでは、これまで日本のスヌーズレンセミナーの中ではほとんど触れられていませんでした。それはこの書籍がまだ日本語に翻訳出版されていなかったためであると考えられます。

上記がマーテンス博士と創始者たちの考え方が決定的に異なっていた点であると考えられます。私の考えでは、スヌーズレンを単なるリラクゼーション活動と見なすのは、大変もったいない話であり、そ

れが教育や治療にも活用することができるのであれば、本当に素晴らしいことではありませんか。スヌーズレンが多方面に利用できるのであれば、それを研究して、どんどん積極的に活用して、人々の幸福や人生の質の向上のために使うべきであると私は考えています。そうした取組みが、病気のある人たちの病気を癒して快方に向かわせたり、発達の遅れている子どもたちの発達を少しでも促すのであれば、大変喜ばしい限りであると思われます。スヌーズレンの多方面における研究をしないで、一方的に理念をもとにその可能性を狭めてしまうのは、宝の持ち腐れであり、本来のあり方ではないと考えられます。私が見たところでは、マーテンス博士は創始者たちが明確に述べられなかった点について自ら指摘することで、人々のスヌーズレンに対する正しい理解を一步進めると共に、それを多方面に応用し活用することができる、という可能性を私たちに示してくれたのだと思われます。

創始者たちがスヌーズレンで大切にしたい点は理解できますが、私見になりますが、自らの実践的な経験から得られた知見とその考察に基づいているのでは、とも考えられます。スヌーズレンに関しては、重度の知的障がい者だけではなく、健常者の乳幼児から高齢者までを含めた、もっと広い適用領域の視野に立って、科学的な知見を踏まえる必要があったように感じています。マーテンス博士は、このように障がい者のみならず幅広い年齢層の健常者をも対象にして、自ら率先してスヌーズレン実践を行い、それによる治療や教育等を行いながら、科学的なデータを取り検証を行っています。ここが、他の人に真似のできない、正にマーテンス博士の偉大を感じさせる点です。単にスヌーズレンの歴史や理念の話をするのではなく、自らいろいろな人々を対象に何度も実践した上で、それをさまざまな角度から検証して、理論化してきました。マーテンス博士は、これまでドイツ語によるスヌーズレンの専門書籍を3冊出版しています。このことは大変な苦労と努力を要した仕事だったと思われ、本当に頭が下がります。私はこの中の最初の1冊のみを、ドイツ留学中から翻訳を始めて、2009年に監訳し出版しています。後で私が聞いたところでは、私が日本語に翻訳したマーテンス博士の最初の書籍は、後に日本語から韓国語に翻訳されて、韓国におけるスヌーズレンの教科書として活用されているとのことです。ドイツ語からの翻訳に比べて日本語から韓国語への翻訳の方が、翻訳が易しかったようです。原著がドイツ語の書籍の翻訳は、ドイツ語に精通していない姉崎には大変な難作業であったといえます。1行のドイツ語の文章を日本語に訳すのに数日かかったこともあり正に悪戦苦闘の連続でした。博士のようにこれまで世界でスヌーズレンの実践と理論を網羅した専門書を3冊も書いた人はいなく、マーテンス博士が世界のスヌーズレンの第一人者であると見なされるゆえんです。

こうしたことからわかるることは、創始者たちはスヌーズレンを最初に始められた偉大な功績のある方々で、実践から得られたスヌーズレンの貴重な考え方や教具づくりに関する有益な知見を書籍にまとめられました。このことは高く評価されます。しかし残念ながら、それを科学的に体系化して学術的にまとめて発表することはしていません。それは創始者たちは、元々知的障がい者施設の職員や指導員であり、研究者ではなかったからだと思われます。その点、マーテンス博士は、元々は教育の実践者であり、しかも研究者であり、自ら障がい者や健常者の別なく、さまざまな人々(乳児から高齢者まで)にスヌーズレンの実践をされて、実践データから科学的な理論を構築されていき、何よりも説得力があり、創始者の気が付かなかった、スヌーズレン本来の基本的な理念や考え方、その有効な実践方法や留意点等を追求されて、書籍の中で重要なさまざまな知見を明らかにしています。

そして何よりも、マーテンス博士は、自身の説と創始者たちの説の違いをよく知りながらも、創始者たちのことを一方的に批判したり、見下したりする態度は決して見られません。むしろお互いに敬意と尊敬の念を持って接していました。ここが大変偉いところであると思われます。世界のある分野の偉大なトップの人たちの人間性や人格はこうあるべきであることを私は深く教えられ、大変勉強になり、心から感謝している次第です。

④わが国初となるスヌーズレンの研究団体「ISNA 日本支部・全日本スヌーズレン研究会」を設立したのは姉崎です。

姉崎はこのマーテンス博士の薰陶を受けて、それまでわが国にスヌーズレンを研究する団体がなか

ったことから、このままではわが国のスヌーズレンの発展はあり得ないと考えて、マーテンス博士の認可を受けてわが国初のスヌーズレンの研究を行う団体として、2009 年に ISNA 日本支部・全日本スヌーズレン研究会を三重県で設立しました。これは大変「勇気」のいることでした。それまでわが国で、スヌーズレンの研修会やセミナーを何度も開催してきて実績と信頼のある日本の某団体の唱える説とは異なる説を初めて唱えたためです。ある方から私に向かって「それは違う」と強い口調で言われたことを今でも覚えています。何事も新しいことを最初に唱え始める人が、始め理解してくれる人がいなく、多くの反対する人がいる中で、自分を理解してくれる人がいなく、大変大きな困難と闘っています。このことは当事者しかわからないことかもしれません。しかし真理を主張しないではいられませんでした。私は「たとえ千万人といえども、我ゆかん」の気持ちでした。「そこに真理があるならば、必ずいつか人々はそれを認める時がくるだろう」というのが私の信念でした。

そして 2012 年には当時勤務していた三重大学の大講堂で全国から参加者を募って、多くの協力者に支えられて、250 名を超える全国からの参加者に向けた、初のマーテンス博士の来日講演を成功させました。博士は、スヌーズレンを初学者にも大変わかりやすく解説してくれました。この時の講演内容は、後に姉崎 弘編著『スヌーズレンの基本的な理解—マーテンス博士の講演「世界のスヌーズレン」—』(2012 年)として自費出版されました。現在は絶版中になっていて、この本の入手はできません。ただこの本はスヌーズレンの初学者にも内容が大変わかりやすく、多くの美しい写真も掲載されていて、大変好評を博しましたので、2025 年 11 月下旬に本書の第 2 版を出版する計画であります。頁も 60 頁ほどの小さな本ですのですぐに読みます。アマゾンで購入が可能です。ぜひ一度手にとってご一読下さい。

⑤ISNA を設立したマーテンス博士を招聘して、わが国で最初にスヌーズレンの資格セミナーを主催して開催したのは姉崎です。

ただこの全日本スヌーズレン研究会では、資格セミナーの実施をめぐって時期が早すぎるなどとして反対する役員がいて意見がまとまらず、私は当時会長として大変苦労した経験があります。研究所会長の姉崎がマーテンス博士と何度も相談をして資格セミナーの日程や費用等を決めたことなので、役員はこれに従ってもらわないと資格セミナーを実施することができません。これでは日本のスヌーズレンを前に進めることはできません。責任は会長がとることなので心配する必要はないのです。組織では重要な決断は会長に一任することが大切です。そうでなければこのような事業は一步も前進させることができません。このことをまず理解してもらう必要があります。マーテンス博士は、大変な苦労をして来日を果たしましたが、さらに苦労を重ねて資格セミナーの日程等の調整や開催を主に担って行ってきた姉崎の労苦を知らず、賛同をせず、理解を示さなかった人たちが一部いることについて、マーテンス博士は心を痛められました。ただ、私は役員の方の中に、私に協力して資格セミナーと一緒にやってくれた方がいたことについては本当に心から感謝しています。

当時体調のすぐれなかつた私は、マーテンス博士と約束していたので、無理を押して 2 年目の資格セミナーをなんとか開催しました。ただマーテンス博士の資格セミナー実施をよしとしない役員のいるこの会の今後の継続は困難であると判断し、後を副会長等に任せ、2015 年に新たに新天地である大阪の地でマーテンス博士の理解と協力を得て、新しい「ISNA 日本スヌーズレン総合研究所」を設立して、新たなスヌーズレンの研究と研修・資格認定の活動を開始しました。今日この新たな団体が、マーテンス博士からわが国で 1 つしか公認されなかつた日本における ISNA の正式な団体となっています。この団体の使命である、マーテンス博士から引き継いだ「スヌーズレンの研究と資格認定」の事業は、その後、2025 年に「ISNA 日本スヌーズレン-MSE 研究・資格認定協会」として、従来の「研究所」から「協会」の名称に改名され、今日姉崎が九州の地でこの団体の理事長を務め、引き継がれ、さらに継続発展しています。

この間、私は大変な苦労を重ねて、マーテンス博士の 2 年連続の来日を実現させ、2013 年と 2014 年に計 12 日間にわたるわが国初となる ISNA によるスヌーズレンの国際資格セミナーを、数名の協力者の支援を受けて開催し、私を含む有志の 16 名が資格を取得しました。当時、世界で資格セミナーを実施していたのは、ドイツやオランダ、日本などの数か国のみでした。創始者たちは、1 日間ないし 3 日間の

みの資格セミナーを実施していたのに対して、マーテンス博士の資格セミナーは、2年間にわたって日程が計12日間と世界で最も長く、受講内容も理論から実技指導まであり、大変内容の濃いもので、理論と実践の両面からしっかりと学ぶ機会が用意されていました。私はこのことを心から感謝しています。

⑥世界にあまり類を見ないスヌーズレンの学術的専門誌である「スヌーズレン研究」誌と「スヌーズレン教育・福祉研究」誌の2つの学術誌を最初に発刊したのは姉崎です。

しかもわが国では、姉崎が中心となって、「スヌーズレン研究」(2013年～2016年)や「スヌーズレン教育・福祉研究」(2018年～2025年、現在継続発行中)といった、海外ではほとんど取り組まれていない、世界にあまり類を見ない、わが国のスヌーズレンの研究論文、さらに海外のスヌーズレンやMSEの専門家による論文や国内のスヌーズレンの実践論文を集めた専門の学術誌(研究機関誌)を10年以上前から、年間に1回発行していく、スヌーズレンの理解や研究成果等を日本の人々のみならず、全世界にも発信していました。このスヌーズレンの学術的事業は海外からも高く評価されています。

⑦資格セミナーの日程やカリキュラム、資格名称等の見直しが今後ぜひ必要です。

わが国では、ISNA日本スヌーズレン総合研究所の私の後任である嶺前会長が2日間の受講で、「スヌーズレン専門支援士」の資格を、約3年の間に計37名の受講者に授与してきました。自分たちの力で資格セミナーを開催したことは評価されますが、ただ2日間のみの受講でしかも試験を課さないで「スヌーズレン専門支援士」の資格を授与するのは、内容が薄く果たして「専門性」のある専門支援士と呼ぶには問題があるのではないか、という意見を、後日私は嶺前会長に、問題提起させてもらっています。嶺前会長もこのことを同様に感じていると思われます。今回この資格セミナー開催の前に、姉崎へのセミナー実施に関する相談は一切ありませんでしたので、私は何も助言することができませんでした。2日間なら、基礎資格である「スヌーズレン支援士」とるべきであり、さらに4日間なら、その上の「スヌーズレン専門支援士」とすることができますが、さらにカリキュラムの中に筆記試験を必ず課して、合格者に資格証を授与すべきであった、と私は考えています。資格を発行する以上、筆記試験を課しその合格者に資格を授与するのは当然のことであると私は考えています。

この資格セミナーの日程やカリキュラム等については、まだ検討が十分に行われていないのが現状です。今後わが国で資格セミナーを実施する場合、わが国の実情を考慮して、マーテンス博士の12日間のセミナーの日程や内容を縮小しながらも、理論と実技を取り入れ、しかも筆記と実技の試験も入れて、どのような内容のカリキュラムにするのが適当なのか、今後十分な検討が必要であると思われます。

⑧マーテンス博士と姉崎の「スヌーズレンはレジャー・教育・セラピーである」とする学説が2010年に世界のスヌーズレンの有識者会議(アメリカに於ける国際会議)で国際的に初めて認めされました。

2010年に、世界のISNAは、アメリカで国際会議を開催して、世界のスヌーズレンの専門家が一同に会して、スヌーズレンの定義などの基本事項について議論を行いました。この会議に日本からは姉崎一人が参加を呼びかけられていて、当初参加する予定でしたが、勤務する大学の都合で不参加に終わり大変残念に思っています。しかし、この会議の中で、スヌーズレンがレジャーだけではなく、セラピーや教育としても活用できることが、定義の中に明確に明記されることになりました。マーテンス博士や姉崎が2003年から書籍や国際スヌーズレンシンポジウム、日本特殊教育学会の自主シンポジウムの中で度々主張し続けてきた「スヌーズレンは、レジャーや教育やセラピーでもある」とする考え方が、公式に世界の有識者に認められるところとなり、これまでの研究活動の努力が公式に認められて大きな喜びを感じた次第です。特に、姉崎は、2003年から4回にわたって、ISNAの国際スヌーズレン会議の中で、スヌーズレンが教育活動であることを全世界に向けて繰り返し発表していて、この努力がようやく世界に認められたといえます。今日、わが国では、これに「療育」と「福祉」を加えて理解されています。

⑨「スヌーズレン教育」を最初に命名して定義し、学校現場に普及させたのは姉崎です。

私は、2011年に6か月間内地研究員として、筑波大学の障害科学域の分野に派遣されてスヌーズレンの研究に従事した際、数名の大学の研究者に、最新の指導法の一つと考えられる多重感覚環境の「スヌーズレン」は、学校では教育活動として捉えられ、自立活動の指導に該当する、と考えられることを伝えたけれども、この姉崎の考え方に対する人は当時誰一人もいなく、今後必要とされる指導法であると理解できる人は誰もいませんでした。私はこのことを大変残念に思った次第です。これが真実です。

今日、姉崎の「スヌーズレン教育」の提唱から12年の年月を経ていますが、この間、日本特殊教育学会でのスヌーズレンシンポジウムの開催や全国の特別支援学校や各県や各市からスヌーズレン教育の講演依頼があり、ようやく全国の特別支援学校などで、2013年に姉崎が「特殊教育学研究」の学会誌で命名し定義した、スヌーズレンを教育と捉える「スヌーズレン教育」という、主に自立活動の指導に該当する授業が特別支援教育現場に浸透して定着してきたことは嬉しく思っています。この「スヌーズレン教育」という名称は世界でもなぜかまだ提唱されていませんでした。今後もスヌーズレン教育を体系化するためのさらなる研究の蓄積が求められています。

真理が世の中の人々に認められるまでには、それを提唱した後に、まずそれに反対する人たちが出てきて、それが認められるまでには長い年月を要しますが、諦めずに継続して自信を持って主張し続けていれば、それが正しいものならば、時間はかかるにせよ必ずいつか世の中に認められる時が来ることを私は深く実感しています。

⑩国際社会におけるわが国のスヌーズレンの研究発表の乏しさを痛感しています。

私は、2003年、2007年、2008年、2009年に、海外で開催されたISNAの国際スヌーズレンシンポジウムで、これまで計4回、拙い英語によるスピーチでパワーポイントを使用してスヌーズレンの研究発表をしてきました。ISNAは、マーテンス博士とフェアフル氏が共同で設立したものであり、その後、2012年のマーテンス博士のフンボルト大学の停年退職に伴って、10年間務めたISNAの会長職をマーテンス博士とフェアフル氏の二人が共に辞任し、後をデンマークの障がい者施設を経営するモーリツ氏(Maurits,E)に譲り、今日名称をISNA-mseの団体として改称して引き継いでもらうことになりました。この国際スヌーズレンシンポジウム(国際会議)での発表に関しては、私の知り得る2010年までは、日本からは姉崎の他に研究発表や実践発表をする人は一人もいなく、日本の某団体からも第1回(2002年)の山中さんを除いて、発表する人が誰もいない、といった状況が続き、国際社会におけるわが国のスヌーズレンの研究発表の少なさや研究意欲の乏しさを痛感しています。

⑪ISNA-mseのわが国における初代 International Board(国際役員)は姉崎が担当しました。

姉崎の国際スヌーズレンシンポジウムでの数回に及ぶ研究発表が評価されて、2012年から2014年にかけて、ISNA-mseの団体の会長のモーリツ氏から委嘱されて、私はISNA-mseの団体の日本における初代のInternational Board(国際役員)に就任しています。姉崎が、これまでのISNAの国際スヌーズレンシンポジウムで度々研究発表を行ってきた実績が国際的に評価されたものと考えています。私の後は、日本の某団体の方が担当しています。

⑫当協会の姉崎は2025年に「スヌーズレン-MSE」®の用語を商標登録しています。

姉崎は、2025年9月に、「スヌーズレン-MSE」®の用語について商標登録を行いました。これにより、この商標の独占使用権を獲得し、他者によるこの商標の使用を防止できることになりました。今日、世界では、スヌーズレンとMSEは同義語として広く理解されて使用されています。私が以前設立したISNA日本スヌーズレン総合研究所が2017年に発行した「スヌーズレン教育・福祉研究 第1号」誌の中で、スヌーズレン創始者のフェアフル氏とMSE研究の第一人者であるオーストラリアの当時ジェームズクック大学准教授のポール(Paul,P)氏の二人が、これらの両用語の歴史は異なるが、両者は同義語であることを、それぞれの論文の中で明確に述べています。私はこの事実を日本国中に広めるためにも、この両者の言葉をセットにして今年商標登録を行った次第です。しかしわが国では、残念ながらスヌーズレンと

MSE は異なるものである、と主張する一部の人があります。スヌーズレンと MSE に関する今日の世界における認識を正しく理解する必要があると思われます。

1970 年代後半にまず「スヌーズレン」の用語がオランダで最初に登場し、ほぼ同時期ですが、少し遅れて英国で「MSE」(Multi-sensory-Environment: 「多重感覚環境」)が開始されました。私が英語の論文や書籍で調べたところでは、MSE には明確な定義はないように考えられます。今日、海外の論文をレビューすると、Snoezelen と MSE は同義語であるとして、Snoezelen-MSE という用語を論文のタイトルに掲げている論文を数多く見かけます。

私たちの「ISNA 日本スヌーズレンーMSE 研究・資格認定協会」は、スヌーズレンの実践と理論に精通し、学術的研究を基盤にして全世界にスヌーズレンを広められた、上記のマーテンス博士の設立した ISNA に設立の起源をもつ団体であり、私はこのことを誇りに思っています。ISNA はマーテンス博士とフェアフル氏の 2 名が共同設立者になっていますが、どちらかといえば、マーテンス博士が実質的に主導した国際団体であると見なすことができる、と私は考えています。このことはドイツのマーテンス博士の所属したフンボルト大学で、2002 年に初めて ISNA の第 1 回国際スヌーズレンシンポジウム(会議)が開催された事実からもわかります。またマーテンス博士が大学の研究者であり、また実践者でもあったことから、ISNA の世界的な活動が、単なる実践レベルの発表会や報告会ではなく、実践発表と併せて、毎年世界各国の大学教授や障がい者施設経営者の研究者の方々が国際スヌーズレンシンポジウムの中でスヌーズレンに関する学術的な研究発表を行っていたことから、世界のスヌーズレン実践者や研究者の多くの人々の信用を勝ち得ることができて、発展していったと私は考えています。

⑬世界のスヌーズレンの発展に寄与したマーテンス博士の功績の再評価の必要性を痛感しています。

ただ今日私が強く感じていることは、これまでのマーテンス博士の国際的なスヌーズレンに関する素晴らしい輝かしい活動や研究成果、専門家育成、といった偉大な実績や功績が、いまだ世界で正しく評価されていないのではないかと思われることです。このことを大変残念に思っています。特に、わが国においては、某団体が創始者の一人であるフェアフル氏を何度も来日させて講演会等を行ってきたため、創始者の説が正しい、これが全てである、と勘違いされている方が多いのではないかと思われます。ややもすると、2012 年まで、世界の第一線で世界各国のスヌーズレン活動を支援し多くの専門家を指導して育成てきて、毎年国際スヌーズレンシンポジウム等を開催して、国際的な研究活動を、世界の先頭に立って実施し人々に広めてきた、世界のスヌーズレンの恩人であるマーテンス博士の偉大な功績を忘れ去っているように思われてなりません。

大変残念なことですが、現在マーテンス博士は数年前からご病気のため療養中であり活動ができなくなります。そのため博士の創設した ISNA や ISNA Snoezelen Professional e.V. の団体がほとんど活動できていない状況にあることも、このことに拍車をかけていると思われます。この博士の偉大な功績を世界の後世の人々に伝えていくことは、博士から指導や恩恵を受けた私たち ISNA の仲間たちの責務であると私は考えています。今日、マーテンス博士の世界における功績の再評価と後世への引継ぎがぜひとも必要です。そのため今後、博士が深く関わってきたドイツや韓国、日本、スペイン等の世界のスヌーズレンの仲間たちとも連携しながら博士の功績をまとめていく作業が必要であると強く考えています。

この偉大な先達であるマーテンス博士は、後年特に、遠く離れた日本や韓国に何度も足を運ばれて、世界的な視野に立って、特に東洋の国々におけるスヌーズレンの普及や資格セミナーにも尽力されてきたことは特筆すべきことであると思われます。中でも韓国からは 10 年間毎年招聘されて、12 日間に及ぶスヌーズレンの資格セミナーを計 10 回以上開催され、今日まで 50 名以上の有資格者を直接博士が育成されたと聞いています。これは、マーテンス博士のスヌーズレンの国際貢献活動として、高く評価される功績であるといえます。

⑭「スヌーズレンセラピー」を一つの治療法として認める、日本の新たな医療制度の創設が必要です。

特にお隣の韓国では、わが国とは異なり、作業療法士(OT)や医師、看護師などの医療の専門家がマ

ーテンス博士から直接スヌーズレンの専門追加資格を積極的に取得していく、以前から国をあげてスヌーズレンを「セラピー」として位置づけ認可しています。病院では医師の指示のもと、OTが「スヌーズレンセラピー」を患者の治療の一環として実施していく保険が適用されています。もちろんマーテンス博士の資格セミナーに参加して、本人が所持している作業療法士の資格に、さらに追加してスヌーズレンの専門資格を取得したOTの方々がこのセラピーを実施していく、韓国の作業療法の学会誌に、このスヌーズレンセラピーによる患者への治療効果等の論文が毎年いくつも発表されています。わが国の方が韓国よりもいち早くスヌーズレンを導入して開始した経緯がありますが、今日では韓国に先を越されてしまっているのが現状です。

わが国でも、スヌーズレンがセラピーとして認可される日が一日でも早く来ることを願ってやみません。このことは今後の大きな課題になっています。日本では、作業療法士会等がスヌーズレンをセラピーとして認めていないため、このハードルは高いと考えられます。しかし、日本の作業療法士の方々の中には、私の知り得るところでは、スヌーズレンはセラピーであることを認識してセラピーを実施している方がいることは確かな事実です。

同じスヌーズレンでも、韓国ではセラピーとして認められていて、一方日本ではセラピーとして認められないのは、世界から見ても大変おかしな話であることから、この点は早急に解決すべき必要性を私は強く感じています。そのための行動が、今求められています。

世界のスヌーズレンの専門家の中で、ここまで自國のみならず、外国のスヌーズレンの発展のために自ら身を削り、尽力されたマーテンス博士は、私の知るところでは、他には誰もいないように思われます。マーテンス博士は、正に世界のスヌーズレンの発展のために、大学の研究室で研究を行う研究者としてだけではなく、積極的に外国へ出向いてまで、いろいろな国の人々と交わり、その出会いを大切にされてスヌーズレンの研修会や資格セミナーなどを通して人々を育て、スヌーズレンの理論と実践方法を熱心に世界の人々に教授され、伝達されて、後進の育成に生涯を捧げられた人物であるといえます。

私ども、「ISNA 日本スヌーズレン-MSE 研究・資格認定協会」は、このマーテンス博士の偉大な実践力に心からの敬意と感謝の気持ちを込めて、微力ながら、その歩みを継承しさらに発展させていきたいと念願しているところです。今後ドイツやスペイン、韓国等のマーテンス博士から直接指導を受けたISNAの世界の志を同じくする仲間たちと共に、お互いの国を相互に行き来して交流を深めながら、スヌーズレン-MSE の実践や研究、国際資格取得に関する内容等についても積極的に情報交換をしていく予定です。この私どもの志に賛同し、共に歩もうとする仲間を現在全国に募集しています。皆様、わが国のスヌーズレン-MSE の発展のために、私たちと一緒に歩みませんか。

今年の5月に、今日的な世界の認識に立って、新しいスヌーズレンとMSEの研究・資格認定協会を福岡県の北九州市で立ち上げました。この団体は私が一から作り上げているため牛歩のごとくで少しずつしか前進できませんが、着実に進んでいることは確かです。これまで私が関わってきた、ISNA日本支部・全日本スヌーズレン研究会並びにISNA日本スヌーズレン総合研究所、さらにこのISNA日本スヌーズレン-MSE 研究・資格認定協会の各団体の立ち上げやわが国のスヌーズレン推進の運営面などで、人間的に至らない点の多い姉崎にご理解と多大なるご支援とご協力を賜りました全ての人々に、心より感謝を申し上げ、厚くお礼を申し上げます。どうぞこれからも何卒よろしくお願ひ申し上げます。

(次回に続く)

2025年11月13日

ISNA日本スヌーズレン-MSE研究・資格認定協会理事長

ISNA日本スヌーズレン総合研究所終身名誉会長

九州女子大学・人間科学部 教授 姉崎 弘